

「木岡哲学対話の会」アンケート

ご氏名：☒
ご所属：☒

1 「木岡哲学対話の会」（3月終了予定）について、お考えをお聞かせください。☒

(1) 次の(a)～(d)の中から、お考えに近いものを選んでください。☒

(a)終了してもよい（終了すべきである）☒

(b)続けてほしい☒

(c)状況次第で、どちらでもよい☒

(d)その他☒

→ () ☒

(2) 上の回答について、具体的な理由がある場合には、ご説明をお願いします。☒

2 これまでの発表テーマ・発表内容の中で、特に印象に残ったものを挙げ（複数可）、その理由を説明してください。☒

3 最終回（3.26）は、これまでの会を総括する意味で、各位のご発言（3分程度のスピーチ）をお願いしたいと存じます。☒

(1) 当日、出席される予定の方は、次の中から選んでください☒

(a)発言したい、(b)発言したくない、(c)どちらでもよい → () ☒

(2) 当日、欠席される方も含めて、本会についてご意見がおありの方は、以下にコメントをお書きください（いただいた回答は、当日コピーを配布して、紹介させていただきます）。☒

回答一覧

○SK

1

(1) (d)

(2)

続けるかどうかでないかは、先生の決める事であって、私のきめる範疇ではないと思います。

当初、先生の講座は色々な方の講義や出席されている受講者の意見が新鮮で参考になることが多かったです。自分の中で整理のつかないことも沢山あったので、先生の講義の中で納得したり同感したり新鮮な視点を切り開いていただいたり面白かったです。

最近、コロナのこともあり殆ど出かけない状態ですが、なぜあちこちの講座に出かけていたのか、自分の中で、いろいろな講座について改めて考えてみると、新しい事実や世の中の動き、自分の知らないことに対する興味を満たしてくると同時に質疑応答の時間でさらに講義内容の理解を深めるという点が面白かったからだと思います。TVやインターネット媒体とは違う私を満たすものが詰まっていたのだと思います。

先生の講座で、最近不満と思うことは講師の方の話をもっとじっくり聞きたいのですが、後半先生の発言時間が長くなりがちでもっと講師と聴講者の意見を聞きたいと思うことがあります。きっとこんな失礼なことをいう人は他にいないと思いますが、大切な場の一つを失う私の残念な気分でもあります。

病気をして以来、外部と接触を制限した生活を送る身として、少し興味の方向が変わってきたこともあって今後公の講座にはあまり出ないと思います。

自分の人生の中でやり残してきたことやどうしても参加したい興味の持てることにのみ行動の範囲を限ろうと思っています。

2

先生の“間を繋ぐ”講座は目からうろこでした。それまで漠然と疑問に思っていたことがずるりと溶けた感じで面白かったです。

それからの縁で先生の講座に参加していましたが、専門過ぎてよく分からない講義もありましたが、どれもそれぞれに面白く2年間通ってなるほどこれが間を繋ぐ事かと思った次第です。

新鮮だったのは、新しい街づくりなどの講座でした。空間をうまく生かしてそこに住んでいる人が生き生きと活動できるように作り上げていくことの面白さを感じる事が出来ました。

3

ご無沙汰しています。

最近、体調やコロナのこともありあまり会に出席しませんでした。最終回との事なのでこの場を借りて、お礼申し上げます。

主婦の私に社会の目を少し広げていただく空間を与えて頂いて有難うございました。社会に出てしまうとよほど自分が意識しないと雑多なことに紛れてあっという間に時間が過ぎてしまいます。気が付けば還暦も過ぎ、孫のような若い方々に交じって学びの時を得られたことは私にとって大変有意義でした。有難う御座いました。

今後とも皆様のご活躍をお祈り申し上げます。

○MK

1

(1) (b)

(2)

1、「木岡哲学対話の会」は研究者・実践家と一般市民が膝を交えて語れる稀有な場である。

2、一般市民が何らかのテーマについて己の意見を開示できる稀有な場である。

3、様々な一般市民の生な考えを聞く事が出来る場である。

3

(2) 私が当会に参加させて頂いたのは3年前ぐらいでしょうか？講演は始めは何処が「都市の風土学」で、何処が「あいだを開く」なんじゃと思っておりました。しかし、参加者の皆様の積極的な討議が素晴らしく、参加し続ける事となりました。木岡先生がご退職後始められた「出合いの広場」でも白熱した討議ができ、面白かったです。「木岡哲学対話の会」が終了となれば、もう木岡先生にお目に掛る機会は次回の「更生の道を拓く」が最後になると思います。

○TK

1

(1) (d)

続けていただきたいという強い気持ちはありますが、それを阻害する外部の状況が大きい

n お無理をお願いすることはできません。再開できる環境になったときに再開していただければ参加したいと思います。

(2) コロナ禍がいつまで続くかということです。緊急事態宣言発出されてもこの状態が出て恒常化する恐れがある状況においては、やはり開催を続けるというのは難しいと思います。

① 都市の風土学 (木岡伸夫先生) ⊕
文化というものを都市の生成という視点から考えている点に興味を引かれました。都市は文化の中心であり、それをリードしてきた人間が作りあげた一つの環境であるというのにもなるのに対して、日本の場合は、古代ギリシャを発祥とする西洋の都市が城壁に囲まれていないことひとつからも、統治者と一般民衆との関係、都市と田舎の関係に影響が及び、さらにその底にある自然や宗教等との関わり方とも関係しているのではないかいということにも関心が向き、インドや中国はどうかと北米、中南米の古代都市はどうだったのかと興味はあらゆる方面に広がっていきます。

② 住民参加における場・人・しかけ (北詰恵一先生) ⊕
住民参加は行政と住民とが共同して住みよいまちづくりをするというものです。北詰先生は、「公」と「私」にまたがるこの複雑な組織について、整合性ある体系を示し「あるべき姿」を提示されていることにも興味を引かれました。現在も、各地域においては、「自治協議会」の設立に努力していますが、「公」と「私」はその行動パターンや利害の判定等に当たって、考え方が相反するところもあるので、組織として動くことには二重と業がでることが残された課題であると思いました。講義では、新たな「公」という定義をしたうえで、リーダーの権限や養成、多くの関係者の連携等必要となる事項がまとめられたので、後はこれを実現させる努力になるということだと思えます。

③ 東西思想対立の克服 (高橋勝幸先生) ⊕
今まで考えたこともない大きくて難しいテーマですが、高橋先生の講義を聴き、その可能性を考えてみました。一神教の西洋と多神教の日本は、ロゴスとレンマの対比にも似たところがあるように思いました。一神教の神も多神教の中のひとつの神と見てくれるといいのだがと思えますが、そんな単純なことではありません。ただ、人間には、あらゆる人種、民族にとっての宗教が共通とするテーマとしてあるのが、「死」と「先祖」であるかというのをどこかで読んだことがあります。故に、ここらへんを基点にして長い年月をかけ人類が多様化を認めるようになれば、少しずつ対立を克服できるかも知れないかかすかな希望はあるのではないかともしやうに思いました。20年ほど前には西洋人が日本のお寺を訪れることなど見かけることはありませんでしたが、7,8年前に京都の寺町の小さなロゴスもレンマのひとりの西洋人が入って行ったのを見てびっくりしたことがあります。キリスト教徒は他宗の寺に入ることはないと思っていたためです。ところが、最近では観光であっても、コロナさえなければ多くの外国人が日本の神社、仏閣を回っているのは当たり前のように目にするので、宗教的対立が遠い将来解消されるということはないことではないと考えてもいいのではないのか考えを変えています。

④ 主体的な学び (森下雅一先生) ⊕
講義では、「いじめを解消する」ことも一つのテーマとなっていて、そのためには、教育の場で子どもたちにアクティブ・ラーニングの手法で学ばせる必要があるという文科省の方針に沿っての説明でした。「いじめ」は、人間心理、道徳、家庭、教育、および行政等広く関係する問題ですが、個人情報の問題等があったら表面的な現象のみがマスコミ等に大きく取り上げられることもあってか、報道で見聞きした視聴者は「ひどい」という気持ちになるだけで終わってしまうのが実態だと思います。この問題こそ、子どもたちだけでなく、大人たちもアクティブ・ラーニングで、解消策を考える必要があるテーマだと感強めました。

⑤ 「歴史を紡ぐ主体～歴史は誰のもの?～」 (佐藤竜馬先生) ⊕
この講義には、残念ながら出席することができませんでしたが、資料を送っていただいたので、読ませていただきました。「地域やコミュニティにとって、歴史とはどのような意味をもつのか?住民が主体となり、地域の歴史を可視化した活動から考える。」とあり、香川県の埋蔵文化財の発掘調査を通じて得られた膨大な資料や報告書を専門家たちにアピールし、地域住民や一般の人々のために役立つよう伝えることに長年取り組んでおられることに感銘を受けました。歴史というと通常は学問としての知識で勉強の対象として考えますが、講義資料を読んでいると、佐藤先生の「歴史は、地域や国にかかわらず自分が今いる存在を支えてくれているものだ。だから、歴史を知り、大切にし、そして後世にも伝えたい。」という熱意がふつふつと伝わってきました。私もそのとおりだと思いました。

⑥ ロゴスとレンマ (木岡伸夫先生) ⊕
これは、木岡先生の授業に一貫して流れている思想です。私は、これまでの仕事柄もありますが、論理すなわちロゴスの世界があるべき世界だと思っていました。ところが、テトラレンマが東洋の思考としてあることを初めて知り、日本人の曖昧さやあなあ的な協調

性もときには意味があることを哲学の面からも理解できて、包容力のある思想だと思いました。考えてみれば、世の中はすべて、レンマの世界だと思ふようになりました。例えば、7色の虹といっても、色と色の間はみな混で赤でも青でもなく、とって紫でもない、まさにテトラレンマの世界であることが認識できます。はっきりした理論体系をもつ物理の世界でもそうなのですから、まして人間世界はどっぷりレンマの世界に浸っていると考えるのが正しいのでしょう。東洋の知恵は深いことを知りました。⊕

⑥ 風景論 (木岡伸夫先生) ⊕

私は、趣味で絵を描いていたため、哲学の視点で風景が論じられることに対して、少しびっくりしましたが、大変興味深く木岡先生翻訳のオギュスタン・ベルク著の「風景という知」を読ませていただきました。この種の本を読むのは初めてであったせもあり、タイトルの割合には難解なところもありましたが、「風景というものは、地球の歴史によってつくられた大地が語るものであり、その中に現れる真善美が人間の環境にとって意味をもつということを理解しなければならない——等」風景は美だけではなく、真と善とも関連付けて考える必要があるとの記述があり、何か非常に重要なことを指摘しているのだと感じました。そういえば、ルネッサンス期に真善美の三美神の絵画が多く描かれていることも思い出しました。⊕

3 ⊕

学生時代には、経済学を学び、社会に出たからは法律と会計の分野の仕事をしてきたため、哲学とは無縁の世界にいました。そんな状態のところ、平成14年ごろ、義妹から木岡先生の授業のことを伝え聞いて、白紙の状態哲学の門をくぐったわけです。それ以来、授業だけでなく懇親会にも参加させていただき、人生も終わりに近づいたにもかかわらず、新鮮な気持ちで哲学という新しい分野での知識を得ることができて幸せの限りです。笑い話ですが、木岡先生のご著書「風土の論理」の購入を家内に注文するよう頼み、家内が書店に電話すると、家庭の主婦のような人がこんな難しい専門書を読むはずがないと思ったようで、「取消しはできませんよ」と何回も念を押されたとのこと、何年も前の思い出となりました。⊕

○MI/YI

1 ⊕

(1) (b) ⊕

(2) まず最初に、20年もの長きにわたり、学生や一般の市民に向けて学び、考える場、対話する場を与えて頂きましたこと、対大学関係の方々や講師の方々との交渉等、どれほどのご苦労があったことかと推察されますが、志高く、強いリーダーシップで続けてこられましたこと、誠に頭の下がる想いです。哲学という少し敷居が高く感じられる学問を私達に関心のあるテーマごとに講師の方々を手配し、専門の講義を受けられる機会を頂き、その上学び考え、対話する場を与えて戴いたという事で、哲学を身近に感じ多大な影響を受けた方々も多いことと思います。出来れば負担の少ない形で会が存続していけるようなやり方があれば良いと思っております。⊕

2 ⊕

参加させて頂いた会は本当に数える程も無いのですが……。⊕
ただ、昨年末の佐藤竜馬先生の『歴史を紡ぐ主体』は大変興味深かったです。地域があり、そこに住む人々が居て、その人達と共に行動しながらそれぞれの歴史を紡いでいく・・・まさにそれをされている当事者の方の生きた学びの声を聞かせてもらいました。私達自身が住んでいるこの土地も又長い長い歴史があり、今迄大切に守られてきたものが何かを学びとり、継承していくという作業を行うことで、自分もその大きな流れの中に確かに存在していることを感じ取ることができるのだと思います。私達自身も意識を変えて大切な何かを見極め、次に継承していくお手伝いができればいいなあと思わせていただいた時間でした。ありがとうございました。⊕

3 ⊕

(2) 申訳ないですが、出席できるかどうかわかりません。⊕

○FW

2

2015年度と2016年度の講義に参加させていただきました。⊕
その時とったノートを見ながら、あらためて感謝しております。⊕

講義のおかげで、それまで知らなかったり気づかなかったりした多くの観点から社会を見ることができるようになったような気がします。そして、格差が広がり続ける中、豊かな人間関係や「足るを知る」の大切さ、環境問題などについて自分の頭で考えながら生きていく、そんな姿勢が促されたように思います。⊕

⊕

私にとってはとりわけ、身の回りや社会の問題と関連させた、町づくりや都市のあり方、建築などに関する講義が面白く鮮烈でした。⊕
私の住んでいる千里中央にもタワーマンションがどんどん建っていくし、また、地方都市に見られる同じような風景にがっかりさせられることが多いのですが、アメリカやヨー

ロッパや香港における先例的諸問題に関する講義や、また、人と人が出会い交じり合える、快適で人間的な社会について考えさせてくださった講義をきっかけに、「本当の豊かさ」を大切な軸にしながら日々を送っております。☺

○FW

1

(2) Cの「状況次第」を選びました。研究者が市民や学生と対話しながら、対等に近い立場に立って学問の創造に参加する、という「木岡哲学対話の会」がなくなるのは、惜しいと考えるからです。他方で、「対話の会」を続けることは大変なことなので、簡単には「続けてほしい」とは言えないとも考えます。☺

2☺

「場所の声を聞く」「小さく解く・混ぜて解く」という観点からリノベーション（既存建物の再利用）について独創的に論じられた江川直樹先生の講義（『縁と出会いの空間へ』第5章「建築とまちのリノベーション」）、ピトレスクという観点からパリの景観保全の取り組みを論じられた江口久美先生の講義（同書第7章「パリの景観保全—ピトレスクをめぐって—」）から多くを学びました。私は建築学科の先生方の、機能主義的な近代都市（コルビュジエ）からリノベーションへという提案と木岡先生の「風土学」「あいだを開く」「場の創造」とを関連させながら、関西大学大学院棟の一室で行われた「人間環境学研究」を心底から楽しみ、享受しました。☺

○HF

1

(1) (b)

(2) 社会人の方々などが参加され、自由な対話ができる非常に貴重な会だと思いますので、是非、続けて頂きたいと思っております。☺

2☺

僕自身の発表である「詩のコスモロジー」の回における、ロノ町さんの感想が、今後の自分のプレゼン発表や授業の方向性を変えるという意味で、特に印象に残りました。☺

○MK

1

(1) (d)

(2) 大学や科研費などの既存の枠にはまらない、とてもユニークなひらかれた場なので、なくなってしまうのは、とてももったいないと感じます。どのような形でも、木岡先生が実現された、参加者の身分を問わない対等でオープンなディスカッションの場は、いつまでも継続すればいいなと願っています。☺

その一方で、木岡先生のプロジェクトの全体（大学に依らずに、ご自身の思想を広め、出会いを実現する）は、この会以外のたくさんの試みがあるので、この会が続くかどうかはファシリテーションの負担もありますし、主催者・事務局の方々のお心次第ではないかと思っています。☺

特にコロナ環境が長期化している中で、「集えば、対話ができる」という前提が崩れつつある中で、何が対話の促進として正解な形なのかは、もはやよくわからない気がします。☺

わたしのとても個人的なことなのですが、この5年くらいの中に「せっかく日本にいるのだから、せめて自分の周囲にだけは健全なディスカッションができる空間を」と思って作ってきたいろいろな場を1つずつ閉じつつあります。リアルな対面の場もそうですし、オンライン上でもそうです。☺

上手く言えないのですが、今の日本（特に都市的な）で、オープンで利他的であろうとすることは、とても損をするし、とても危ない（ひとから害を加えられる）ことです。だからと言って、自分の信じて生きてきた道徳を放り出して、他人に対して壁を作ったり、利他的であることをやめたりすることはできません。何がベターな案（やり方）かよくわからないので、対話もひとと出会うことも休止中という感じです。☺

2☺

わたしは長く参加させていただいていたわけではないので、たくさんのテーマは知らないのですが、自分が出させていただいた回は、どの回もとても印象に残っております。発表者の方々が（おそらく普段よりも）突っ込んだ話をされていて、それに対して木岡先生が容赦なく率直に切り込んでいくこともとても刺激的で楽しかったです。☺

一番印象的だったのは、フロアの方々がどのひとも自信満々に率直に自分の意見をぶち上げ、かつ、ほかのひとの意見にもオープンに耳を貸そうとしていた姿です。参加者の

方々が生き活きとしていて、社会の知的な構成員としての自負と責任を持っておられて、そういう姿は日本ではあまり見たことがなかったので、心に深く刺さりました。知的な能力において活発であり、クリエイティブであることには、本当に年齢は関係ないのだ（いくつになっても童心で、発見的な知的冒険者であり続けられる）と強く教えていただきました。Ⓜ

3Ⓜ

わたしはこの会の終わりの方に何度か出させていただいただけの、駆け込みの参加者でしたが、木岡先生との出会いや、木岡先生の哲学対話の会との出会いは、わたしにとっても大きな衝撃をくれました。人生の半分を外国で育ち、日本社会や文化に努力すれど一向に馴染めないわたしにとって、「日本にこんな健全なディスカッションの場があるなんて！」という衝撃です。Ⓜ

ディスカッション（対話）は、その場でのテクニックではありません。ディスカッションとは、自分の信念を持って毎日を生き、ここぞという場でその信念を隠さないこと、拙くとも自分自身のことばで自分の信ずるところを他者に伝えようとする愛や情熱だと思います。Ⓜ

木岡先生の哲学対話の会には、それを持った方々が何人もいて、しかもその方々がディスカッション技術をメシのタネにするプロの研究者ではなくて、いろんな職種だったり無職だったりする、いろんな年代であること（特に年配の方たちが生き活きしている）が、わたしに清涼さを感じさせてくれました。Ⓜ

わたしは対等でオープンで愛のあるディスカッションの場がないコミュニティや社会は、滞在していて苦しいです。だから、日本に来るたびに苦しいです。日本社会とどうかかわればいいのか、40才間際になってもよくわかりません。Ⓜ

でもそれはわたしだけではなかったのかもしれない。木岡先生の哲学対話の会でいろんな方のお話を聞いていて、日本文化しか知らない日本の社会に根ざしたひとでも、何か苦しいからこうやって一所懸命、「哲学対話」ということをやろうとしているのだと感じました。わたしは自分が余所者（外来種）だから苦しいのだと思っていましたが、国産のひとたちにも苦しいのだとしたら、哲学対話（健全なディスカッションの場）がなければ、全員が窒息して、困ってしまいますね。Ⓜ

わたしは今、日本にとどまっている期間が5年以上と長引いて、とても息をするのが難しいです。溺れて死んでしまわないために、立ち止まって、自分にとっての酸素ボンベ（哲学対話のあり方）を考えています。この会を大事に想うみなさんが思い描くそれぞれの「自分の酸素ボンベ」ってどんなものでしょう。Ⓜ

○KT

1

(1) (d) Ⓜ

(2) 社会的経験の豊富な方の意見もあり、教えられることも多々あります。

2

・寺島先生の「政治哲学」でハンナ・アーレントなどの指導を受け、今日のポピュリズム、などの問題に目を開かされた。Ⓜ

・単に「風土」と思っていたものが、今日の対話に向け重要な問題であることを教えられた。Ⓜ

○SK

1

(1) (b)

(2) 私自身の環境の変化で、参加できるか不透明な状況にあること。

2

2019.5.27 關先生「關一の父近義と沼津兵学校」

2019.6.28 木岡先生「ベルクの風土学」

[上の2件、〈「往き来」の持つ力の意味〉と付記]

2021.1.22 船曳先生「詩のコスモロジー」Ⓜ

○TT

1

(1) (b)

(2) 木岡哲学をひろめ、継続していく意味でも、続けて頂きたい。

2

11/27佐藤講師：文化財を通じての人々のつながりが印象的でした。